無意識的空想への治療者の影響に関する心理臨床研究
―女性治療者の妊娠・出産に注目して―

博士後期課程　臨床教育学講座　　若佐　美奈子

【要約】

心理療法では、治療者と患者という生きている人間が相対するからこそ、両者に様々な感情や感覚が生じ、その治療関係に特有の雰囲気が治療空間に醸成されていく。治療関係で生じるそうした感情や感覚、雰囲気は、治療過程を促進することもあれば阻害することもある。本研究は、治療者が患者および治療空間や治療経過に及ぼす影響について、女性治療者が妊娠・出産を経る場合に焦点を当て検討するものである。本研究では心理療法の中でも精神分析的心理療法の理論的枠組み・実践技法に準拠し、患者がもつ「無意識的空想」の諸相に着目する形で議論を進めてゆく。

精神分析的心理療法は、治療関係に現れる転移と逆転移を基盤にして、患者のこころの在り様を理解し、援助する方法である。そこでは、両者に生じる感情や感覚についての体験的理解を積み上げることで、患者のこころの真実に迫っていくことが目指される。つまり、治療関係が穏やかで協力的であるから治療が成功しているとか、治療で患者が攻撃感情を露わにしているから失敗している、といった次元ではなく、患者が自らのこころを振り返る中で、苦痛や恐怖を感じたとしても、患者がそれに圧倒されることなく、治療者とともにそれを丹念に見つめ、考え、理解できるようになることにこころを砕く。そうして、とてつもない不幸を「ありきたりの不幸にし」（Freud, S., 1895d）、患者が自分の人生を抱えて生きていく力を獲得できるように援助するのである。こころの大部分が無意識に占められると想定する精神分析の実践においては、このように、意識的な水準での両者の意見交換や話し合いの深層にある、非言語的で無意識的なこころの現れに注目し、こころの構造全体の変化を模索するのである。

さて、患者の無意識を理解するには、厳密な治療設定の中で生じてくる転移の現れ、すなわち無意識的空想の在り様を理解することが不可欠である。無意識的空想とは、患者が意識的に語る空想（白昼夢）や、充足を阻まれて抑圧された無意識的願望のことではない。それは、生まれて間もなくからずっと存在するこころの基本的活動のことを指しており、精神分析家の Issacs, S.(1948)は「本能の心的随伴物で、心的表象」と定義している。無意識に在り続けるこの無意識的空想というものは、人生で反復される、自身の世界観や対人

関係の型紙のようなもので、治療場面においても、患者の歴史やパーソナリティ、症状を雄弁に物語る。例えば患者は、受容的で中立的な治療者の前であっても、見捨てられる、馬鹿にされる、支配される、期待され過ぎている等の空想を展開するものである。我々は皆、自分でははっきりと意識しないままに、自分自身や他者、そして世界について空想を抱き、それを基本にして出来事を体験しているが、例えばその空想が非現実的なもので、現実とのかかわりにおいて修正されることなく、強固に維持されるなら、その人に苦痛をもたらす症状や心理的問題にもなり得る。

治療者は、患者の無意識的空想を理解し、解釈を投げかけることによって、患者の無意識の意識化を促す。患者が、そこでの情動体験を意識化することができれば、それを自己理解に生かすことができる。

こうした無意識的空想の探索のために、精神分析的心理療法では、伝統的に、厳格な治療設定および転移・逆転移の理解と解釈が必要不可欠であるとされている。治療者は、それを妨害しないよう、自分自身の人生上の出来事や価値観等を自己開示しない「匿名性」や「中立性」という態度を守るよう努める。治療者の個人的な価値観や意見を自己開示すると、患者の無意識的空想の展開を妨げてしまうからである。しかしながら、治療者は生きている人間であるため、様々な出来事が起こりうる。突然の病気や自然災害の他、就職や結婚、妊娠、転職、離婚、近親者の死等、人生上の出来事が意図せずして治療に影響を及ぼす場合がある。治療者は、自分自身のこのような人生の変化と、「匿名性」や「中立性」という重責に、どう折り合いをつけるのだろう。多くの治療者が、自身の人生の転機や変化が治療に影響を及ぼす場面で、葛藤に苦しんでいるのではなかろうか。

本研究では、心理療法において治療者が匿名性をとりわけ維持できなくなる「女性の妊娠・出産」に焦点を絞り、その場合の諸相を描き、考察してゆく。なお、そこには筆者が治療者として心理療法に関わる中で得た妊娠・出産の経験が大きく寄与している。

我が国は、女性臨床心理士が圧倒的に多いにもかかわらず、治療者の妊娠が治療に与える影響に関する研究が、諸外国に比べて少ない。しかし昨今、女性治療者のライフサイクルやセクシャリティをめぐる問題が、心理臨床学の俎上に乗り始め、議論が盛んに行われており、それは、事例研究・実証研究の増加や学術雑誌の特集および学会のセミナーの開催等からも明らかである。すべての女性治療者が妊娠・出産を経験するわけではないが、臨床心理士の 7 割が女性であり、なおかつ 20 歳代及び 30 歳代が半数以上を占めている(藤原 2009; 日本臨床心理士会 2009)ことを考慮すると、治療者の妊娠が心理療法に及ぼす影響をめぐる様々な問題は、臨床心理士社会にとっても、身近で重要な課題である。

筆者は、心理療法に困難をもたらす治療者の妊娠・出産について考査すべき点が、以下

の２つに集約されると考える。

第一の側面は、治療者が妊娠によって起きる困難を、治療者側の臨床実践・研究上の課題として捉え、治療者のメンタルヘルスまたは治療者アイデンティティの問題として検討する姿勢である。こちらは既に、白坂(2007)や山口(2009)によって描き出され、妊娠期の治療者が身体的にも心理的にも弱さを感じやすいことや、治療者として振る舞うことの限界を感じたり、治療枠の崩壊を恐れたり、罪悪感を抱きやすいこと等が示された。

第二の側面は、患者が治療者の妊娠という事象をどのように体験するのか、またそれによって治療プロセスがどのように変容していくのかを考えることである。この観点では、患者側の無意識的体験に関する問題を考慮することになるが、我が国では個々の事例研究で記述されるにとどまっている(原田 1999; 日下 2002; 笠井 2009; 西坂 2013 等)。そこでは、中立性の脅かし等の技法上の問題、また産休に伴う分離不安や見捨てられ不安等の転移のテーマ、さらに逆転移の積極的利用についての考察がなされている。しかし、そこで強調されているのは、やはり「罪悪感」や「能力の低下」という治療者側の体験であった。上別府(1993)は、系統立てられた研究において、患者 27 人の反応と治療経過を記述した点で他とは一線を画すが、患者の反応をその「強さ」の程度や行動化および身体化といった、比較的客観的な反応で分類しており、治療者と患者の無意識のダイナミクスについては十分に描ききれていないように思われる。

また、1990 年代前後と現代とでは、治療者や患者、そして女性をめぐる現実的な情勢は大きく変化している。女性治療者の妊娠・出産とその後の職場復帰がさほど珍しいことではないという現代的状況を考慮した上で、筆者は、治療者の妊娠が「患者の空想をひっかける釘」(上別府 1993)であるという視点を重視して研究を進めた。患者が元々内包していた問題やテーマ、世界観、すなわち無意識的空想が、治療者の妊娠によってどのように促進または阻害され、展開していくのか、といった独特のダイナミクスを綿密に考察した臨床的検討・研究は、臨床実践上、きわめて有用なものであろう。

したがって本研究の目的は、先に述べた二つ目の側面、すなわち患者の無意識的空想に治療者の人生上の変化が及ぼす影響について、特に、治療者の妊娠・出産の影響に焦点を当てて考察することである。そのための手続きとして、精神分析理論を基盤に考察を行い、仮説を生成していく(第一章、第二章)。次に精神分析理論の知見を用いて、無意識的空想の諸相をより詳らかにし(第三章)、臨床事例を用いた実証研究を行い、上記の仮説の検討を深めていく(第四章、第五章)。最後にこれらを総括して、結論とする(終章)。

第一章は、「無意識的空想と転移に関する理論的考察」と題して、無意識的空想や転移といった、精神分析理論の重要概念に関して先行研究をレビューし、定義や歴史的背景、

さらに転移現象としての無意識的空想の現れについてまとめた。それによって、本論文において論じる「無意識的空想」や「転移」を明確に提示した。また、治療者側の要因が患者の無意識的空想に及ぼす影響については、治療者と患者の性別や、治療者のライフサイクルの影響、治療中の偶然のハプニングや休暇等に関する先行研究を概観し、その上で治療者の妊娠・出産が心理療法に及ぼす影響の特異性を浮き上がらせた。

第二章「治療者の妊娠が心理療法に及ぼす影響」では、調査研究、インタビュー研究、日本および海外における事例研究等、本主題に関連する諸研究を概観した。筆者が、日本の事例研究を網羅的に調べ、それらで表現されている、治療者の妊娠前と妊娠を伝えた後の治療状況を比較検討したところ、治療者の妊娠以前の転移関係の在り様によって、治療者の妊娠に対する患者の捉え方が異なっている可能性が強くうかがわれた。すなわち、治療者の妊娠は、転移性恋愛を起こしている患者にとっては裏切り行為であり、治療者をライバル視している患者にとっては、異性と交際することによって優位性をアピールする必要性を生じさせるものであった。

これらは、治療者の妊娠が元々の患者のこころの在り様をより明白に描き出すきっかけとなったことを示しており、治療者がその患者の表現を適切に扱うことができれば、より有効な介入が可能であることを示唆している。しかし、先行研究は、治療者‐患者間の関係性から生じる無意識的空想の展開という視点による記述が十分でないため、患者の内界の変化について厳密に考察することができない。重要なのは、治療者の妊娠を告げた後の患者の反応が肯定的か否定的かの分類ではなく、患者の反応に対する治療者の理解と解釈の方法と、そこからもたらされる反応が、治療経過でどのような意味をもって展開していったのかを丁寧に検討していくことである。本章では、このように課題を提示した。

第三章は、「治療者の妊娠によって患者に喚起される無意識的空想の諸相」と題し、精神分析学分野の研究、特にクライン派精神分析の知見に当たることによって、人々の無意識に眠っている妊娠・出産を巡る空想の諸相やその力動的な意味について探究し、考査した。その目的は、治療者の妊娠や出産をめぐる様々な問題を考察する際の素材とするためである。Freud, S.および Klein, M.の記述から、子どもが母親の妊娠にいかに衝撃を受けるものなのかを抽出し、子どもが母親の(妊娠した)身体について抱く空想の在り様、主にその恐怖と攻撃性、好奇心についてまとめた。それらは Klein, M.が提示したフェミニン・フェイズという時期に特有の現象であった。さらに、Klein 派精神分析において発展したいくつかの概念を用いて、母親が父親とつがい、子どもを身ごもることに対して、子どもたちが描いている空想の諸相を記述した。それは例えば「結合両親像」や Meltzer, D.(1966, 1986, 1992)の提唱する「倒錯」「侵入的同一化」「閉所」概念である。そこでは、母親との

分離があまりにも苦痛な体験であるために、母親の体内に乱暴的に侵入して同一化することによって、本来の痛みを痛みと感じない病理的な在り方が描き出されている。

第四章では、「事例研究（1）治療者の妊娠と患者の無意識的空想をつなげること」として、筆者が関わった 2 つの臨床事例を挙げ、患者の無意識的空想の展開について考察した。いずれの患者も、過去の体験が鮮やかに想起され、母子の依存関係と性的な空想に関する転移が活性化したことで大きく動揺したものの、出産休暇後の治療過程でこれらの空想を扱うことにより、これまで避けていた、性や死、攻撃性等のテーマに取り組むことができた。筆者は、治療者の妊娠・出産および出産休暇が、患者の無意識的空想とどのように関連づけられるかを正確に理解し解釈することはもちろん、治療者に生じる逆転移を丁寧にモニタリングすることが重要であると論じた。さらに妊娠中と出産後では、治療者の担う仕事が異なるのはやむを得ず、治療期間全体を見渡した上で、現実的に患者の自己探索を促進するかかわりが求められることや、治療空間をコンテイニングする主治医や治療機関の機能が重要であると論じた。

第五章では、「事例研究（2）治療者の妊娠を契機に変化した治療プロセス」と題し、別の 2 事例について考察を深めた。1 つ目の事例は、患者が胎児に嫉妬をおぼえたことによって、感情表現や自己認知が大きく変化したことと、アクティング・アウトがアクティング・インへと変容した際、治療者が患者に持った「子ども」イメージについて論じた。もう一つの事例は、妊娠した治療者の体調不良によるキャンセルが、治療者に罪悪感を生じさせ、それが患者の空想とつながって、長期間の膠着状態を招いたものである。スーパーヴィジョンという第三者の視点および患者の病理の正確な理論的理解が、そこを脱するのに役立ったことを示した。

終章は、「妊娠した治療者が心理療法を行うことの可能性と課題」と題し、本研究の総括とした。現代的視点から匿名性の意義を再考し、空白のスクリーンという二次元の治療者像を刷新した。考えられないもの(空想)を考えられるようにする、コンテイナーやアルファ機能をもった、人間としての治療者は、理論的理想である「匿名性」を目指し続けるものの、それが完遂できない点にこそ重要性がある。治療者の妊娠は、肉体的にも精神的にも私的生活と臨床生活とを分別できない事態である。治療者はその現実と限界を受け入れ、何をいつまで匿名化することが治療的か考えねばならない。また、治療者の妊娠を治療に活かすための条件として、「患者の無意識的空想の理解」「患者の自己探索を現実的に促進すること」「逆転移のモニタリングとその利用」「治療空間のコンテイニング」を挙げて総括とした。さらに、Money-Kyrle(1971)が挙げた 3 つの「人生の事実」という観点から、心理療法場面における妊娠・出産という事象の意味について考査した。最後に、今後

の研究課題として、男性患者および子どもとの心理療法についても綿密に検討・考察する必要性があることと、マネジメント等、実際的な問題についても研究が発展していく余地があることを示した。